
真・恋姫無双～三人の御使い～

キサラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜三人の御使い〜

【Nコード】

N6983K

【作者名】

キサラギ

【あらすじ】

投稿した物を一度破棄し、改めて投稿してみました。

- ・この作品が嫌い
- ・オリキャラが受付られない
- ・一度読んで読む気を失ったetc

という方は今すぐ回れ右を。

なお、この作品ではオリキャラがチートです。普通に他作品の技)

ジンプ、サン、leet()も使用します。直接的な名前はなるべく控えます。ええ、あくまで『なるべく』です。

心が広く、駄文でも気にしない・チートでも問題無いという方は読んでってね。

プロローグ 三人の御使い（前書き）

反省はしてる。

後悔は、そんなにない。

読みにくい箇所や気づいた事は、感想板に書いてほしい。
なお、苦情・文句は受付ない。

プロローグ 三人の御使い

「一刀Side」

「…ん……」

ぼやけてる俺の意識を覚まさせるように日の光が容赦なく差し込む。日光って目をつぶっていても眩しいよなあ…

「くあゝ…もう朝かあ…。二度寝したいけど、早く仕度しな…い…と…?」

目の前に広がる光景を見て、そんな朝の若干墮落した思考がフリーズした。俺の目の前には、果てしなく続く地平線に、なんか中国みたいな感じの山がある。どう頑張っても、東京にこんな場所があるとは思えない。…そういえば、水墨画ってこんな風な景色描いてたな。

「…いやいや、落ち着け俺。ちゃんと現実を見る。こういう時は、冷静に、ここ最近の事をなるべく正確に思い出そう…」
という訳で、回想スタート。

【回想モード】

キーンコーン、カーンコーン

「…ふわあゝ。やっと終わった。」

俺は下校時のチャイムを合図に眠っていた体を起こした。

今日は部活動である剣道も休みだし、祖父ちゃん直伝の剣術稽古も珍しく休みだから、帰ったら久々にゆったあゝりできる。

…つと、自己紹介がまだだったな。俺の名前は北郷一刀。ここ、聖フランチェスカ学院に通う数少ない男子生徒だ。なぜ、数少ないかと言うと、元々聖フランチェスカはお嬢様学校で、それが一昨年から共学になったからだ。

おかげで、男子は一クラスに2、3人程度だったりする。その分覚え易いけどな。

「さてと、これからどうするかな。」

そんな事を考えていると…

「北郷殿。」

「すみません、北郷君。今、少し宜しいですか？」

「ん…？」

呼ばれた事に気づいて振り返ると、そこには見知った顔が二つあった。

「よう、鋼牙に大河。俺に何か用か？」

こいつらの名前は、東堂鋼牙と東堂大河。名前から分かる様に二人は双子だ。尤も二卵性双生児の為外見が全く違うが。

「うむ。用、という程の事でもない。」

こっちの堅苦しい口調で話するのが兄の鋼牙。童顔で、黒の長髪を後ろでポニーテールにしているボーイソプラノの持ち主。そんな見た目の女の子っぱさとは裏腹に、ここでは『武器屋』とか『喧嘩屋』とか呼ばれてる程の喧嘩好き。実際、その辺の大人じゃあ束になっても勝てない位強いし、おまけに、かなりの怪力だ。

そんな、パツと見可愛い男の娘。しかし中身は『無双』みたいなのところが、何故か一部の女子に人気だったりする。

だが、コイツに彼女は居ない。なんでも、女が苦手らしい。勿体ない、及川が聞いたら発狂するぞ。

「あの…聞いてますか、北郷君？」

「…ん？ああ、ゴメン。ナンだっけ？」

「いえ。お暇な様でしたら、一緒に帰りませんか？と言ったのですよ。」

んで、今俺に敬語で接しているのが弟の大河。

髪色は鋼牙と同じ黒色だが、髪型が天パーで眼鏡をかけており、兄に似ずイケメンって感じの奴。他には…ああ、あとコイツには不思議な力があるらしく、『導術』とかいう代物らしい。実際、俺もこの目で見たことがあるが、アレは凄かった。

…まあ、そのせいか俺や鋼牙以外の人間とは一線引いた接しかたをするけどな。

「…承諾して頂けるか、北郷殿？」

「ん？…ああ、それくらい別に構わないよ。」

そんな訳で、俺は鋼牙達と帰る事になった。

〈10分後〉

校門を出てからしばらくして、

「ああ、そうそう、北郷君。」と、大河が何やら思い出した風に話を切り出した。

「今度の休日に隣町にできた博物館で三国時代の歴史展覧会をやるそうなんです、宜しければ一緒に参りませんか？」

「へえ、面白そうだな。是非そうさせてもらおうよ。」

「ふむ、決まりだな。」

「では、駅前に九時に集合で宜しいですね？」

大河の問いかけに頷く俺と鋼牙。今から楽しみだなあ。

〈数日後〉

「…少し早く着き過ぎたかな？」

携帯を確認しながら、俺はそう呟いた。

時刻は約束の30分前を示している。

さすがに、来ていないだろうと考えていると…

「ほお…約束の30分も前に来ているとは良い心掛けだな、北郷殿。」

この声は…

「そう言うお前だつて早いじゃないかよ、鋼牙。」

言いながら振り返ると、そこにはフランチェスカの制服を来ている鋼牙の姿があった。

なぜ、鋼牙が制服姿なのかと言うと、私服だと高確率で女子に間違えられるからだ。

「あれ？そういえば大河は？」

俺は辺りを見ながらそう尋ねた。

「ああ、大河なら調べ物があり多少遅れるから先に行つて欲しいとの事だ。」

「調べ物？」

俺が聞き返すと、鋼牙は

「うむ。詳しい事は我も知らされてはおらぬ。」と言った。

「わかった。それじゃあ、さっさと行くか？」

「ふむ、参るとしよう。」

それから数時間遅れて大河とも合流し、展覧会を堪能した。いやあ、充実していた。

…はい、回想終了。

……
……

「…うん、さっぱり分かん。」

つうか、分かる奴が居たらすぐに来い。500円迄ならくれてやる。そんな事を考えていると…

「おい、兄ちゃん。珍しいもん着てんじゃねえか？」

…ん？

振り返ると、ガラの悪そうな三人の男達が居た。

「あの…それって、俺に言ってるんですか？」

念のため聞き返す。

「ああん？他に誰が居るんだよ？」

…ごもつともで。

「ほら、分かったんならさっさと身ぐるみ一式置いて行けよ！」

三人組の一人が短剣をチラつかせながら叫ぶ。

…………つて、短剣？！

いや、落ち着け俺！このご時世に本物の短剣なんて持ち歩いている訳が…

ビュン！

風切り音とともに、刃がすぐそこ迄迫っていた。

「…ッ！？」

咄嗟に後ろに跳んで躲したが、左の頬に僅かながら切り傷が出来ていた。

恐らく、刃先が当たったのだろう。

同時に、あれが偽物なんかじゃない事も判明した。

「マジかよ…」

クソッ、一体何がどうなってるんだ！？

いや、それよりも先ずはこの窮地をどうするかだ！

（何か…何か良い考えは……！）

俺は辺りを見ながら必死に考えた。

辺りは見渡す限りの平地。当然、街だつて遠くだろう…

おまけに相手は三人組で全員武器アリ。

対する俺は単身。そのうえ手元に武器は…ん？

「こ、これは…!!」

自分の腰辺りに手をやると、そこには日本刀が差してあった。俺はすぐに鞘から刀を抜き正眼に構えながら、確かめるように刀を見る。

龍の装飾が施された柄に赤みがあった黒の刃：間違いない。

「妖刀・屍龍帝…ッ」

どうしてコイツが、なんて考えてるヒマは無いな…

「ガハハ！おい、見る。コイツ、オレ達とやる気だぜ！」

その言葉を始めにに他の奴らも嗤い出した。

「…お前らみたいな追い剥ぎ如きに負けるような腕じゃないさ。」

「なにい!?!」

「ガキが調子にノリやがって!!」

「ぶっ殺してやる!!」

そう言つと、男達は同時に突っ込んで来た。

俺はそれをバックステップで躲し…

「せいっ、はあ!!」

ドシュッ!!

ザシュッ!!

すれ違い様に斬り付ける。

「ぎゃあ!?!」

「こ…の、ガキ…イ…」

ドサ…ドサ…

はあ…残るは、あと一人…!

「クソッ！天下の黄巾賊がガキ一人に負けられっかよ!」

そう言つて背後から斬りかか…

「はあ!」

ザシュッ!!

「ぐはあ!」

……る前に振り返り様に斬った。

「…って、あれ?」

今コイツらなんて言った？

『天下の黄巾賊がガキ一人に負けられつかよ！』

「黄巾賊…？」

黄巾賊つて、飢饉や圧政に苦しんでいた民衆が武装蜂起したって言うあの？

そんな事を考えていた時だった。

「あ、あの…？」

「ん？」

振り返ると、そこには三人の美少女が居た。

一人は栗色の髪をした、優しい印象を与えてくれそうな子だった。

今話しかけて来たのもこの子のようにだ。

その左側（俺から見て）には、艶やかな黒髪をポニーテールにして
いる凜とした子が居た…黒髪の娘はなんか、目茶苦茶訝しげに俺を
見てるけど。

そして、その子と逆サイドに居るのは小さく、活発そうな赤い髪の
女の子だ。

（話しかけて来た子はともかく、後の二人は相当の手練だな…って、
なに女の子に警戒してんだよ…）

「あの…？聞いてますか？」

栗色髪の子が心配そうに聞いてきた。

「ん。ああ、ゴメン。俺に何か用かな？えつと…？」

「あっ！そういえばまだ自己紹介してませんでしたね。」

そう言っていると、栗色髪の女の子から自己紹介を始めた。

「わたしは劉備。字は玄德。」

「鈴々の名前は張飛なのだ！」

「関雲長とはわたしの事だ。」

「……………はああああ？」

待て。待て待て、待ってくれ！？

この子達が劉備に関羽に張飛だつて？まさかとは思ったけど、本当に三国時代にまでタイムスリップしたのか？！

「…いや、タイムスリップとは、また違うよな？」

史実では劉備も関羽も、それに張飛だつて男の筈だ。

じゃあ、ここは俺の知ってる三国志とは似てるだけで別の世界なのか…？

「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんなんて名前なのだ？」

「ん？ああ…そうだな。名乗らしておいて自分が名乗らないのは失礼だよな。」

そう言つて俺は三人の方に向き直つた。

く所変わつてく

「……ん……んう……？」

僕が目覚ますと、そこには広大な平地が広がっており、見上げれば雲一つ無い青空が……

「……………え？」

広大な平地？

雲一つ無い青空？

「ここは……はて？一体どこなんでしょう？」

とりあえず、日本……少なくとも東京都では無さそうですね。……と。

「オイ、その眼鏡！」

……………僕ですね。ええ、僕の事でしょうとも。

いえ、良いんですよ？呼称は人の自由ですし。でも、眼鏡って……

「オイ、聞いてんのかよ?! てめえに言っただよ!」

……と。無視はいけませんよね。

「申し訳ありません。少し、場の展開についていけなくて。

それで、いつたい僕にどのような御用件で？まさかとは思いますが、身ぐるみ一式置いて行け!……なんて内容じゃ……」

僕としては、軽い冗談でした。……次の一言を聞くまでは。

「なんだよ、わかってんならさつさとしゃがれよ。」

ニタア……と嗤いながら男達の一人が曲刀をチラつかせる。恐らく本物でしょうね……加えて向こうは三人。構え方からして素人でしょうが……こういうのに慣れてらっしゃるようだ。

「やれやれ……。仕方ありませんね。」

苦笑しながら戦闘態勢に入る。とは言っても、武器なんて物は無いので素手ですけど。

「ああん? んだよ、ヤル気？」

「『窮地に陥った時こそ、状況を冷静に判断、分析し、自分が最善と思った方法で処理できてこそ策士』というのが、僕の持論なものでして。」

自分自身に言い聞かせる意味も含めて、笑顔でそう答える。

……………誰です? 今、『策士関係無いじゃん。』とかツッコミを入れた

のは？

「んじゃあ…望み通りブツ殺してやるよ！」

その言葉を合図に手下と思われる二人が襲いかかって来る。

「はぁ…ッ！」

ドゴアッ！！

ボゴウッ！！

「かはっ……………」

「うぐっ……………」

ドサ…バタン……………」

「……………あ？」

指示をした人が目の前の出来事が信じられないといった風な顔で呆気にとられています。

ちなみに何をやったかと言うと、『硬氣功』というモノで肉体を強化して、鳩尾に拳を叩き込んだのですよ。

「さて…お仲間がやられてしまった今、貴方に残された道は限られました。ここから早急に立ち去るか、又はお仲間の様に僕に倒されるか…それとも…」

そこまで言って右腕を肩の高さくらいまで上げる。

「…？てめえ、何を…？」

「…灼熱の断罪^{イフリート}」

そう呟いた瞬間。僕の右腕は何時ものそれではなく、まるで灼熱の魔神の腕のように燃え盛っていた。

「な、なな、何なんだよ、てめえ！？なんで、てめえ腕が…っ！！」
相手が震えた声で聞いてくる。無論、答える気はありません。

「さて。逃走、気絶、焼死…好きな方を選んで下さい。」
上っ面は笑顔で、心の中ではどう叩きのめすかを考えながら選択を

ない。」

そう水色髪の女性が言うのですが…でしたら、貴女も警戒心解きません？

「…春蘭、秋蘭。退がりなさい。」

この者と少し話がしたい。」

「はっ！」

「御意！」

成る程、金髪の女性は二人の上司に当たる人物なのでしようね、今の二人の様子から見ると。

「私の部下が少し粗相を働いてしまったようね。許して貰えるかしら？」

「…いえ。構いませんよ、お嬢さん。」

「なっ!? 貴様、華琳様に対して何様のつもりだ!そこに直れ、叩き斬ってくれる!」

「落ちて着け姉者。この者も悪気があった訳では…」

「…?」

なにやら黒髪の女性がお怒りのご様子。何か気に障る事でも言ってしまったのでしょうか?

……………あ。

「ああ、すみません。初対面で『お嬢さん』はありませんでしたね。平にご容赦を。」

「構わないわ。春蘭、貴女も武器を納めなさい。」

「し、しかし華琳様…」

「…春蘭。私の言うことが聞けないのかしら?」

自分の命令を承諾しない部下に対し視線で訴えている。

「と、とんでもありません!」

そう言うや否や武器を納める黒髪の女性。

…というか本当に速いです。恐らく、5秒とかかってません。

「有り難うございます。えっと…………?」

そつえば、まだ名前を伺ってませんでした。

「あら、そういえばまだ名を名乗ってなかったわね。」
そう言っただけ彼女は自分と自分の後ろに控えている人物を紹介して下さった。

「我が名は曹孟徳。そして、そこに居る二人が夏侯惇と夏侯淵よ。……どうかしたかしら？」

「……え？ああ、いえ。大丈夫です、お気になさらず。」

よほど変な顔をしていたのでしようね。彼女……曹操さんに心配をかけてしまいました。

にしても、曹操に夏侯惇、夏侯淵ですか……本当に何がどうなっているのやら。ハア……

「オイ、貴様。華琳様に名乗らせておいて自分は名乗らない気か？」

「……おや。それもそうですね。」

僕は服装を正して曹操さん達に向き直った。

（所と時刻変わって）

「……………?」

我が目を開けると、見馴れない天井があった。

妙だな、我は自室で寝ていた筈だが……?

起き上がってみると、自室どころか、自宅ですら無いようだ。ザツと家具などを確認する。

椅子、机、武器入れ、寝台、明かり……………ん?

「何故、見知らぬ部屋に我の私物があるのだ？」

念のため中身を確認する。

「槍、日本刀、大剣、弓、短剣、その他諸々……………うむ、やはり我の物だな。ケースも、中身も。」

ガチャツ……

「……ん？」

音のした方に目をやると、そこには褐色肌で銀髪の妙齡の女が立っていた。

「おお、目を覚ましたようじゃな。」

「……っ……」

キツ！つと敵意を籠めて睨むと、こちらを安心させるかのように女はフツと微笑んだ。

「安心せい。捕って食おうなどとは微塵も思つたらんわ。」

「…貴様、何者だ？何故我はこの様な所に居る？これを持って来たのは貴様か？」

警戒を解かぬまま問い掛ける。とりあえず、基本的な情報を得ない事には始まらぬからな。

「儂か？儂は」

バアアアン！！

「ねえ、祭！あの子もう、起きた？」

「ちよっ、雪蓮！いきなりどうしたの？せめて訳を…」

「…ハア。二人とも、もう少し静かに入られてはいかかが？それと策殿、見ての通り目を覚ましておるぞ。」

我らの会話を遮るかのようにまた女が入って来た。

特徴は…一人は桃色の髪に褐色肌、額の痣。

もう一人は黒の艶やかな長髪に眼鏡。またもや褐色肌、と言った所か。

「祭殿。できれば、私と雪蓮をそう言った形で同列に並べないで欲しいのですが…」

「なにを言うか冥琳。御主が策殿を止められればこつはならなかったであろう？」

「うぐっ…し、しかしですね。このような雪蓮を止めるのは…」

「見苦しいぞ、冥琳。」

「ぐっ……」

「あらま…珍しいわね、冥琳が祭に口で負けるなんて。」

………

.....

.....

「私は放置か？というか、帰っても良いか？」

「おお、すまん。どこまで話したかのう？」

「いや、まだ何も話されて無いのだが……」

「む？そうじゃったかの？すまん、すまん。」

カツカツと大笑いしながら銀髪の女が謝罪を述べるが……悪いと思つておらぬな。

「それで……結局貴様らは何者なのだ？」

とりあえず、先を促す。いっこうに話が進む気配が無いから……

「あ、もしかして自己紹介してた？」

「……『してた』、というより、『するところだった』と言った方が的確な様だぞ、雪蓮。」

「……えへっ」

「……まあ、策殿達が来たのは好都合じゃ。二人にも名乗ってもらおうとしようかのう。」

ふむ、得られる情報が増えたな。上々。

「良いわよ。私は孫策、字は伯符よ。よろしくね。」

……驚いた。それは驚いた。何せ目の前の女が自分の名を孫策と言っていたからな。

嘘を言っている様には見えないし、何より納得している自分がいる。

「ああ、孫策殿……で良かったか？」

「ん？なあに？」

にこやかに孫策殿が言った。

「孫策殿、あとの二人の名はなんと申す？あと、できれば此処が何処なのか、何故我が此処に居るのか、他にも二、三聞かせて貰いたい。」

「ええ、良いわよ。二人もそれで良いでしょ？」

「ああ。私はそれで構わないわ。」

「儂も異論は無い。」

承諾を得たようなので、視線で先を促す。

「わかつてる。まず二人の名前だけど……」

……

……

「……ふむ、なるほど。概ね状況は理解した。」

孫策殿達に状況を説明され、我は一人納得していた。

つまり孫策殿達の纏めるところだろうか。

先ず黒髪の女が周瑜、銀髪の女が黄蓋だと言うこと。

この地は南陽と言い、袁術という者が治めているということ。

徐々に朝廷の力が弱まり、野党や飢餓が増えて来ていること。

前王であり孫策殿の母でもある孫文台は劉表との戦で敗れ、それが

原因で今は袁術の客将という身分でいること。

妹の孫権達は、徒党を組ませ無いよう離れた建業に居ること。

そして、何故我が此処に居るかだが……

「まさか、荒野で倒れていたところを助けられていたとはな……」

どうやら、偶然近くを警備していた孫策殿と黄蓋殿に発見され、此

処まで運ばれ、揚句看病までしてもらった様だ。

「そうとは知らず、数々の無礼、許して貰えるとは思わぬが、どう

かご容赦願いたい。」

そう言つて頭を下げる。

「ちよっ、ちよっ！顔を上げてよ、別に気にしてなんかないから

！」

「……恩に着る。ところで、これは何処にあった？」

武器入れを指差しながら孫策殿達に尋ねる。

「ああ、それ？それなら、あなたが倒れていた近くに置いてあったわよ。」

それにしても、それ何が入ってるのよ？」

「まったくじゃ。その荷を運ぶのに連れていった兵の大半を要したぞ？」

溜息混じりに孫策殿と黄蓋殿に言われた。

「まあ、私の武器を一式詰め込めてあるからな。確か、総重量は百四十貫：いや、もう少しあったか？」

「百四十貫じゃと?!」

「嘘、そんなにあるの!？」

「…そんな重いものを持って動けるのか?いや、そもそも持ち運べるものなのか？」

「そこまで驚く程でも無いと思うのだが……」

そう言つて三人の前で持ち上げ、しよい込んでみせた。

そして、そのまま室内を少し歩いてみる。

「ほお……」

「ふむ……」

「へえ……」

…なんだ、この反応は?別段、何を期待した訳では無いが…この視線は堪えるな…

「…つと、すっかり忘れていた。なあ、孫策殿。」

武器入れを降ろしながら孫策殿の方に振り向く。

「ん?なに?」

「確か孫策殿達は、今は袁術の客将なのだったな?」

「…ええ、そうよ。あんなの客将やってると思うと、ホントに頭にくるけどね。」

孫策殿は心底悔しそうだった。

「ふむ、そうか……」

その事と孫策殿達の心情を確認し、我は尋ねた。

「では、孫策殿。単刀直入に尋ねる。」

「…反逆のメドは？」

そう真剣な目で聞いた。

「…ツ?!」「」

予想通り三人は驚愕していた。無理も無い、恐らく秘密裏にやったであろう事が何処の馬の骨とも解らぬ奴に指摘されたのだからな。

「貴様…!!」

周瑜殿が警戒心と殺気を混ぜた目で睨んで来る。

「そう案ずるな周瑜殿、袁術に話す気は微塵も無い。…そこでだ孫策殿。」

「…なによ。」

ふむ、こちらも警戒しておるな。

「我を、貴殿の配下に入れてはくれぬか?勿論、階級、役職は貴殿の好きにしてくれて構わない。」

「……………え?」

「だから、我を貴殿らの配下に入れてほしいのだ。」

「…またどうして急に?」

訝しげに聞いて来る孫策殿に、我は言つてやった。

「半分は、民の平和を、日常を、笑顔を守りたいから。」

「…残りの半分は?」

「この大陸に居る猛者と戦いたい。」

実際こつちの理由の方が大きいかも知れぬがな。

「ふうん…」

そこまで聞いて孫策殿が考える。

「その言葉…『笑顔を守りたい』っていうのに嘘、偽りは無い？」

「無論。」

「これからの時代は、想像もつかない戦の毎日になるだろうが、良いのか？」

「上等だ。」

「…御主、死ぬやもしれぬぞ？」

「覚悟なら、とうにできている。」

それから、しばしの沈黙。

「…ねえ、冥琳、祭。」

「ああ、私もお前と同じ考えだ。」

「儂もじゃ。」

「そつ。それじゃあ天の御使いちゃん。」

「む？決まったか？」

「ええ。これからよろしくね。」

「期待はしないが…まあ、足は引つ張らないでくれよ？」

「うむ。ところで、御主の名をまだ聞いてなかったのう。」

「む？…おお、そういえば、まだ名乗ってなかったな。これは失礼した。」

そう言つて、片膝立ちで手の平と拳を合わせ三人に向き、名を名乗った。

（荒野にて）

「俺の名前は北郷一乃。聖フランチェスカ学院の2年生で、剣道は八段。天の御使いなんて大層な者じゃないけど、此処とは違う世界から来たのは確かだよ。よろしく、三人共。」

「別の荒野にて」

「お初にお目にかかります。僕の名前は東堂大河と申します。此処とは異なる世界…そうですね…天の国より派遣されました。以後、お見知りおきを。」

「南陽にて」

「我が名は東堂鋼牙。此処より遠き異国から来た。孫伯符殿、周公謹殿、黄公覆殿。我が武は貴殿らの牽いては民のためにある。この力、存分に使ってください。」

この世界に、三人の御使いが舞い降りた瞬間である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6983k/>

真・恋姫無双～三人の御使い～

2011年10月9日21時14分発行